

「2018 年第 12 回中部 NGO-JICA 中部地域協議会」議事録

(以下、省略)

小川：4月に多田の後任として着任した小川です。よろしくお願ひします。本日は司会を私と、隣にいらっしやいます名古屋 NGO センターの中島共同代表と一緒にさせていただきます。よろしくお願ひします。

お手元に資料をお配りしています。それに沿って進めていきますが、もし途中で資料がないことに気付かれた場合、手を挙げて声を掛けていただければこちらでご用意します。

それでは、議事次第に沿って、出席者の自己紹介を NGO 側の中島さんから順にお願ひします。

中島：5月22日にありました総会の後から名古屋 NGO センターの代表理事を務めています。それまでは13年間、西井理事長が NGO センターをずっと引っ張ってくださっていました。その後では十分ではありませんが、私と八木代表理事で1人分を2人で分かち合いながら、その役割を進めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひします。

八木：今、中島さんから説明がありましたが、今年から共同代表として名古屋 NGO センターの代表理事を務めることになりました。私自身は3年目の理事でして、所属団体はペシャワール会名古屋と、不戦へのネットワークです。まだ期も浅いので、経験も知識もあまりありませんが、これから皆さんと一緒に勉強をして、一生懸命やっていきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひします。

龍田：名古屋 NGO センターと、アジア保健研修所の理事をしています、龍田です。よろしくお願ひします。

杉本：名簿では2番目にあります、特定非営利活動法人地域国際活動研究センター、略称 CDIC の事務局長の杉本正次です。よろしくお願ひします。

石田：NPO 法人ル・スリール・ジャポンの石田久美子です。今は代表がブルキナファソに行っていますので、私が出席することになりました。よろしくお願ひします。

後藤：イカオ・アコの後藤です。草の根技術協力事業の受託をしています。JICA には大変お世話になっています。本日は発表をします。よろしくお願ひします。

瀧本：NPO 法人 DIFAR の事務局をしている瀧本規久子です。私の団体も JICA の草の根技術協力事業で5年間お世話になり、今月やっと無事に着地しました。今は最後の報告書を仕上げ、明日提出予定です。よろしくお願ひします。

北奥：名古屋 NGO センターで政策提言委員をしている北奥です。よろしくお願ひします。

坂井：名古屋 NGO センターの坂井敏子です。本日は国際協力カレッジの報告をします。どうぞよろしくお願ひします。

横山：バングラデシュの人々を支える会、横山です。名古屋 NGO センターでは監事をして
います。よろしくお願いします。

石本：名簿では一番上になりますが、一般社団法人 **Bridges in Public Health** の事務局をし
ています、石本です。主に保健活動に特化した NGO で、東ティモール、ラオス、バ
ングラデシュ辺りをフィールドとして活動しています。よろしくお願いします。

筒井：名古屋 NGO センターで政策提言をしています、筒井広治です。よろしくお願いします。

中島：すみません。この NGO 側でコーディネーターをしている方は、ちょっと手を挙げて
ください。イカオ・アコさんと、瀧本さん、八木さんもですね。全員で 5 名のコーデ
ィネーターで、この JICA 側のコーディネーターと一緒に企画しています。よろしく
お願いします。

小川：よろしくお願いします。続いて、JICA 側の紹介をします。順番に自己紹介をお願い
します。

佐藤：中部センターの佐藤です。連携推進課の草の根技術協力事業を担当しています。よろ
しくお願いします。

阪倉：JICA 中部の所長をしています、阪倉です。どうぞよろしくお願いします。

木下：JICA 中部の次長の木下です。よろしくお願いします。

内島：JICA 中部連携推進課の内島です。よろしくお願いします。

村上：JICA 中部研修業務課の村上です。先月から研修業務課長として着任しています。よ
ろしくお願いします。

青木：JICA 中部連携推進課の青木です。私は主に広報を担当しています。よろしくお願いします。

梅村：同じく JICA 中部の連携推進課の梅村です。よろしくお願いします。

中島：泉京・垂井の河合さん、お願いします。

河合：遅れてすみませんでした。垂井町で地域づくりや、フェアトレードを行っている
泉京・垂井という団体の河合です。よろしくお願いします。

小川：どうもありがとうございました。それでは、阪倉所長から開会のごあいさつをお願い
します。

阪倉：本日は皆さま、本当にお忙しい平日の夕方にお集まりいただき、ありがとうございます。
今回は 12 回目の NGO と JICA の協議会です。大体年 2 回開催してきており、
もう 6 年たちました。本当にこれまでいろいろなことを話し合ってきましたが、や
はりその時期その時期で、いろいろと関心も変わってきますし、世の中の状況も変わ
ってきますので、このように定期的集まって話をするのは、それなりに意味がある
と思っています。

私は着任してまだ 1 年半ですので大きなことは言えませんが、ただ、やはり 6 年
たちますとメンバーが結構変わってきていると思います。特に、これまでずっとお

世話になっていました西井理事長が今回はもういらっしやらないため、今後は共同代表のお二人方にいろいろとお世話になると思いますので、ぜひよろしくお話ししたいと思います。

また、JICA 側でも司会をこれまで行っていた多田が海外に赴任をしたため、今回は新しいメンバーを迎えています。

本日は幾つかのテーマが既に設定をされています。前半の報告事項は毎回行っており、説明をしてきている内容です。協議事項は、今回 DIFAR さんと、イカオ・アコさんからお話をいただけます。私は個人的にも大変楽しみにしています。

特に DIFAR さんは、最近まさに活動を終えられたとのことで、活動の内容、成果はもちろんですが、特に JICA の草の根技術協力事業で活動をされたこともあるため、良かった点、あるいは良くなかった点を含めて、いろいろとお話を聞きたいと思います。

前回の協議会が去年の 10 月だったと思いますので、それから半年以上たちました。なごや地球ひろばもリニューアルをして 9 カ月ほどたちました。つい最近、また企画展を始めました。ご覧になった方もいるかもしれませんが、食と SDGs といったテーマです。まだご覧になっていない方は、ぜひご覧いただきたいと思います。

まさに昨年あたりから、SDGs という単語がいろいろなところで飛び交うようになり、JICA もそれなりに意識をして活動をしています。むしろ世間の動きは、民間企業で意外と SDGs を意識した会社が増えています。それから、静岡市では SDGs 都市宣言のようなことをされて、自治体でもとても意識をされているところがあり、少しずつ盛り上がってきているのではないかと思います。

われわれの行っている活動と SDGs は切っても切れないところもあります。ぜひこの協議会の中でも、SDGs を少し意識しながら話ができればいいと思います。本日は限られた時間ですが、ぜひ有意義な話ができればと思います。どうぞよろしくお話しします。

小川：ありがとうございます。それでは、続いて報告事項に移ります。

本日の報告事項はお手元の次第のとおり 4 点あります。最初に「2018 年度草の根技術協力事業の募集要項について」です。内島から報告をお願いします。

内島：それでは私から報告をします。先ほど阪倉から、この後はそれぞれ着席してとありましたので、恐縮ですが私の番から着席して報告します。よろしくお話しします。

その前に、先ほどの自己紹介の中でお話ししようか迷いましたが、この冒頭で簡単に自己紹介をさせていただきます。この協議会に私は初めての出席です。前回までは市民参加協力課の高坂が出席していましたが、私は去年の 12 月に着任をして、高坂の後を引き継いだ後任の課長です。

また、今年の 1 月に市民参加協力課の名前が変わり、連携推進課になりました。ですので、前回の協議会との比較でいうと、課の名前が変わって、それから課長も交替

しています。ただ、本日はご報告する草の根技術協力事業については、引き続き連携推進課で担当させていただいています。報告事項の1つ目として、「2018年度草の根技術協力事業の募集要項について」の、JICAからの1つ目の報告は、私、内島から申し上げます。よろしくお願いいたします。

まず、資料がありませんが、口頭のみでのご説明です。今年度の草の根技術協力事業の募集開始とそれに伴うホームページ上の募集要項の掲載は、例年と比べると遅れていましたので、ご心配の向きもあったのではないのでしょうか。既にご承知かと思いますが、6月29日にJICAのホームページ上に掲載され、現在は募集が開始されています。

ただし、3つの事業の形態、スキームのうち、パートナー型と支援型の2つが6月29日に募集開始になっています。もう1つの地域提案型については、まだ募集要項に掲載されていませんが、今は7月中には同様に掲載するといったアナウンスのみが載っています。いずれにしても多少遅れましたが、パートナー型と支援型については、既に募集開始がされていますし、地域提案型についても、間もなくの募集開始になります。

それらの内容については、例年とさほど変わるものではありません。ただ、本日の報告が主な中身ですが、その周辺で変更と申しますか、今年の補足事項の説明があり、そのことについて報告します。ホームページ上でも募集要項はそのまま載っていますが、募集要項が載っている説明のところに一文掲載されていますので、読み上げます。

募集要項は、それぞれ支援型、パートナー型に分かれて段落が載っています。支援型のところには、「2018年度の募集要項を公開し応募を開始しました。2018年度の募集は1回となります」と、このような書き方をしています。例年では2回の募集をしていたものが今年度は1回に変更になっています。

そして、「募集締め切りは2018年10月29日の月曜日で、採択結果発表は2019年3月下旬予定です」と、例年のスケジュールと比べると募集締め切りから採択までの期間がとても長くなっていることにお気づきかと思います。また、「案件採択時期は採択から1年後程度を予定しています」とあります。以上の3点です。

1回になることと、結果発表が3月下旬になることと、案件の開始時期は採択から1年後程度を予定しているといった主な3点の留意事項がここに掲載されていますので、あらためてこの場でご報告させていただきました。

また、パートナー型ですが、同様に簡単に読み上げます。やはり同じく募集は1回であることを書きました。また、支援型の募集の締め切りは、先ほどは10月29日とお話ししましたが、パートナー型については、その約1月後の11月30日金曜日と書いています。採択結果の発表は、これは先ほどの支援型と同じく、2019年3月下旬予定です、案件開始時期は採択から1年後程度を予定しています。こちらも先ほ

どの支援型と同じ書きぶりになっています。

以上、支援型についても、パートナー型についても、今年度については先ほどお話ししたとおり 3 点の変更があるとご理解をいただきたいと思っています。既に募集は開始していますし、地域提案型については 7 月、今月中には同様に募集要項を掲載し、それをもって募集開始となり、3 案件の募集がそろって進みます。

3 点については例年に比べると変更があることをご報告しました。その理由については、東京での NGO-JICA 協議会で東京の本部から全国の代表の方に説明をしていますので、後ほどの中島さんからの説明が少し重なるかもしれませんが、ここでは割愛します。

現時点で JICA の予算の逼迫（ひっばく）の状況があり、それに伴って先ほどお話ししたことが生じています。時間の関係もありますので、ご質問があれば後ほどお答えします。私からの 1 つ目の報告は以上です。ありがとうございます。

小川：ありがとうございます。今、今年度の草の根技術協力事業について報告をしましたが、これに関して皆さまより何か質問等がありましたら、お願いします。

瀧本：当会が 5 年前に案件を採択されてから開始までに、やはりちょうど 1 年かかりました。確かあのときは、それまでに始めないとこれで終わりといったリミットでした。今回は 1 年以降ですか。逆に、1 年以降いつまででしょうか。

小川：はい。まさに今、ご指摘がありましたように、従来は 1 年以内に契約をしないと行かないといったことで行っていましたが、今年度については、まずその縛りがなくなります。早くても 1 年後です。ですので、それ以降順次案件の詰まり具合によって契約交渉に入って、早ければ早く進みますし、相手側の事情等々を加味して、もう少し遅れるものもあると考えています。ただ、1 年以降いつまでに契約をするといったところは、まだ特に本部からも指示、連絡がありませんので、現段階では特に決まっていません。

他にご質問はありますか。なければ、後ほどお受けします。

それでは、続いて 2 番目の「中部 4 県の NGO 等現況調査について」です。私からご報告します。お手元にお配りの資料の中の資料 1 の 1 枚紙をご覧ください。ご承知のとおり、私ども JICA 中部は、愛知県、静岡県、岐阜県、三重県と、4 県を所掌しています。この 4 県における NGO や NPO や、あるいは公益財団法人と呼ばれるような団体が、これまでも草の根技術協力事業に参画していただいたところです。

しかしながら、例えば支援型についても、一時は 8 つほどの団体から手を挙げていただいた年もありますが、最近は 1 団体、2 団体となっています。あるいはパートナー型についても、同じ NGO が、1 つが終わって、また次にといった形で、小さいパートナーも、新しい団体が参入してこないといったところが現状としてあります。そういった中で、今後私どもと連携していただけるような団体と、より関係を深めていきたいので、まずはこの機会に、この 4 県においてそういった可能性のある団体、

例えば現在は途上国での実際の活動はしていないけれども、途上国の課題と類似したような国内の地域の課題に向かい合っている NGO、将来的には海外に目を向けるようなところもあり得るといったところも、われわれで探してリストを作った上で、今後は私どもと連携できる可能性があるのかどうか探っていき、現況調査を始めることを予定しています。

基本的には NPO 登録等をされているような団体や、名古屋 NGO 協議会に登録されているような団体などは、既にリストアップしていますので、この後、各県の国内協力窓口が有しているような情報等と併せて、その中で先ほどお話したような趣旨に合致する対象に対して、より詳しいアンケート調査をさせていただくことを考えています。

そういった趣旨ですので、本日ここにお越しいただいているイカオ・アコさんや、DIFAR さんのような既に実績のあるところについては、アンケートは行わないと思っています。そのような形で進めることを想定しています。

もし、皆さまで、こういった団体もあるといった情報をいただければ、こちらでそういった団体も加えることも検討していきたいと思います。既に中島さんからは東海市民社会ネットワークも、そういった情報をお持ちではないかと伺っていますので、われわれで整理していきたいと考えています。

以上、簡単ですが、NGO 等の現況調査をご紹介します。この件で、何かご質問等がありますか。

杉本：一言だけいいですか。

小川：はい。

杉本：特に異議申し立てではありません。1つは、例えばいろいろな団体の応募が少なくなったのは、JICA 側からいろいろな縛りが出てきたことも事実です。例えば、パートナー型を行ったところは、支援型は行えません。

あるいは、金額を全体の予算額でなくて、国際登録分野に限ってだけの計上で行うとか、そういった細かい、むしろ育てるよりは、大きいところで伸ばしていくといったように、こちらからは見えるような施策的なことが数年にわたって行われたところもあります。

実際にいろいろと可能性のあるところを、それぞれの可能性を伸ばすような形が必要ではないかと思います。このアンケートを取るときも、あまり応募をしていないところだけに出して、過去は応募したけれども、なぜ応募ができなくなったかも団体によっては必要だと思いました。以上です。

小川：ありがとうございました。今のご指摘にありました、なぜ応募できないのかといったようなところについても、今、準備を進めているアンケートの中で、応募しようと思ったけれどもしない場合は、その理由を教えてくださいといった記載も含めています。それらも拾いながら、検討していきたいと思います。

特に小さいほうの支援型ですが、皆さんはご承知のとおり、私どものこの中部においても、そういった、まだ海外で実際に活動をされていないような方々に対しても、そういったものに対する PDM、PCM の考え方や、あるいはその課題に対する取り組みの考え方などの研修の機会を設けていますので、そういったところを新たにご案内していくことで、新しいところの参入を必要があればご案内によって促していきたいと思っています。ありがとうございます。他はよろしいですか。

それでは 3 つ目です。つい先般、東京で NGO-JICA 定期協議会がありました、そちらで議論のあった「今後のテーマおよびアクションプランについて」、名古屋 NGO センターの中島さんからご報告をお願いします。資料については、資料 2 が入っていますので、ご覧ください。よろしくお願いします。

中島：資料 2 の議事次第をご覧ください。これを読むと、どのような内容が協議され報告されたかが一目瞭然です。個別のことはまたご説明しますが、その裏側に NGO 側コーディネーターの出席簿のようなものがあります。それには、こちらにも NGO 側コーディネーターと JICA 側コーディネーターがあります。NGO 側コーディネーターは 1 から 7 番までです。地域のネットワーク NGO としては北海道、関西、名古屋、あとは名古屋の、または東京の大きな NGO がコーディネーターになっています。JICA 側コーディネーターは見えていただいたとおりです。ちなみに、この NGO 側コーディネーターは登録 NGO の制度があり、その登録 NGO の互選によって NGO 側コーディネーターが選ばれる形を取っています。

次に、早速年間テーマが協議されました。この年間テーマに関しては次のページのエクセルの表の年間テーマ（案）をご覧ください。今年の年間テーマに関しては、最初が草の根の技術協力案件の質の向上です。これに関しては実施事項にも書いてありますが、SDGs の、「誰一人取り残さない」の達成のための草の根技術協力事業の質の向上を促進するというので、ワークショップが企画されます。それぞれ草の根技術協力事業に取り組んだ NGO のベストプラクティス、事例研究、成果と課題共有、そしてその審査評価項目に関する協議をして、2019 年度募集案件の審査、評価に盛り込むべきポイントの提案をすることになっています。担当 NGO は左側に書いてある NGO が担当しています。

2 番目の JICA ボランティアと NGO の連携促進に関して、今年 1 年取り組んでいきますが、特にこの地域は ICAN の井川さんが担当しており、JICA 側の青年海外協力隊事務局と協議を進めています。派遣前と派遣中、帰国後の連携、また募集のときの連携といった 4 段階程度に分けて、今後もっと JICA ボランティアと本邦 NGO の連携を深めていくことが行政のレビューで提案され、JICA は今年はこのに取り組むことを NGO 側に投げ掛けられ、それを受けて井川さんが中心になって進めています。

NGO 側としては、特に人材や財政の面でメリットとしては派遣中の JICA ボラン

ティアが本邦 NGO の駐在事務所に実際に人材派遣のような形で組み込まれ、一緒にできればそれは一番理想的な形であろうといったところで、それを一つの獲得の目標にはしている状況です。

それから 3 番目の国内連携強化です。こちらは JICA の国内機関、それぞれの地域のセンターと、ネットワーク NGO が、それぞれの地域の中で連携強化の取り組みをすることで、実施事項を見ていただきますと、JICA とネットワーク NGO が進める地域との連携強化に関する取り組み状況・工夫の共有、今後のさらなる強化へ向けた課題、可能性、取り組みの提案になっています。

具体的には多様なアクターとの連携促進、先ほど小川さんからもありましたが、もっと国内課題に取り組む NPO などを取り込むことで裾野を広げられないかとも考えています。それから、市民への働き掛けとファンディングです。それから、国際協力の担い手の育成です。

これらに関してももう少し詳しいものが次のページにあります。アクションプランで、今年の 4 月から 2020 年の 3 月までの 2 年をかけて取り組もうといったものです。詳細がアクションプランに挙げられています。

そこで、私が担当していますが、名古屋 NGO センターとしては、1 番の多様なアクターとの連携促進で、先ほどありました各地域の既存の機会の活用や国際協力の多様なアクターの機会の強化といったところで、国内課題に取り組む NPO、NGO が名古屋 NGO センターの加盟団体の中にもそのような団体も多いです。

また、東海市民社会ネットワークが G7 サミットと同時並行で市民サミットを行いました。その市民サミットを行うことによって、そこで生まれたアクションプランが東海市民社会ネットワークです。これは岐阜と愛知と三重のそれぞれのネットワーク NGO です。三重の場合は NPO の NPO センター、NPO の加盟が多いです。その 3 県にまたがる NPO、NGO の幅広いネットワークで行政との協働をテーマに、また政策提言活動をテーマに、3 年目の活動を迎えています。

その後、3 年たって地球環境基金のファンドが切れた後にどうしようかといった話をしています。その後もまた持続的な活動をしたいため、今、事務局をまた三重の NPO センターから変えて、新たな取り組みを進めようとしています。そのときのテーマとしては SDGs をテーマに、地域と国際協力の両方を視野に入れた形の活動を東海市民社会ネットワークとして事務局をしっかりと立てて進めていこうとしています。

そのような SDGs に取り組む東海市民社会ネットワークと、JICA の地域センターと、JICA 中部で何か協働が進められないだろうかといったことも私の頭の中にはありますが、また具体的に進めていくことを相談させていただきたいと思っています。

もう 1 つの名古屋 NGO センターとして取り組みたいこととして、3 番の国際協力の担い手の育成と NGO 人材の裾野拡大です。活動内容のところをご覧ください。地

域ネットワーク NGO の人材育成の事例学習で名古屋などを書いてありますが、これは名古屋 NGO センターがもう 15 年以上続けている N たま（NGO のたまご）があります。NGO のスタッフになりたい人のためのコミュニティーカレッジです。

N たまの好事例を他の地域でも JICA のセンターと、それからネットワーク NGO の協働によって広めていきたいといった潜在的なニーズがあると全国でも聞いています。そういったニーズを掘り起こしながら、必要に応じて名古屋の NGO のセンターの職員、または N たまの卒業生、また N たまの現役生が地域に行って、そこでセミナーなどをして広げていけないだろうかということも、そのアクションプランの中に特に入っています。

そして、2 番目のところは特に名古屋 NGO センターの名前も実施団体に入っていますが、主には今、関西の NGO 協議会が JICA 関西を中心に NGO 協議会と企業、自治体、大学などで SDGs プラットフォームをつくっていますので、そこがベースになって地域におけるファンドレイジングをして、JICA 基金のような NGO が使いやすい基金の地域版ができないだろうかということで、2 番のアクションプランが挙げられています。

そのような活動を今後 2 年間かけて進めていきたいというのが、アクションプランになっています。

もう 1 つですが、先ほど JICA 国内事業について報告事項がありました。それは資料にはありません。これは先ほどお話がありました JICA 資金ショートの影響について、2018 年度の募集選考スケジュールの説明の中で、事前に NGO 側がまとめた質問書に答える形で JICA 側から説明がありました。

質問書と併せて聞き取り結果がありますが、それも手元にはありません。それは NGO 側が各地の草の根技術協力事業を受託している団体に対してアンケートの聞き取りをして、どのような JICA 資金ショートの影響が出ているかを、資料を事前に提出しましたが、そのときの資料として配布はされませんでした。

NGO 側と JICA 側で信頼を醸成しながら協議会を進めてきましたが、コーディネーター会議の場などで事前に JICA の資金ショートの原因などの説明がなく、現在に至ったことに対し、NGO 側からの不信感を抱くといった表現の意見がありました。

JICA はこの原因としては管理部門と事業部門のマネジメント不足が及ぼした結果であり、このための改善策として予算執行管理室を設置するなどの対応を取るといった説明がされました。この資金ショートの影響がどのぐらい続くかということ、まだはっきりしたことは分からないとの説明がありました。

いずれにしても、せつかくこのような協議会といった形で全国でも行っていますので、その対等な協働のパートナーシップとを大事にしながら、信頼を取り戻しながらまた進めていくことになりました。これが JICA 国内事業についての主な論点だったと思います。

最後に市民社会スペースアクションネットワーク、NANCiS 設立の簡単な説明がありました。皆さんのお手元にもその資料があります。これは簡単に説明させていただきますと、この設立趣意書の 2 段落目のところにあります。2013 年 12 月に成立した特定秘密保護法に反対する NGO に対する負の影響を回避するための秘密保護法 NGO アクションネットワークが設立され、活動をしてきました。

さらに安保法制に反対する NGO ネットワークの NGO 非戦ネットと連携し、そして特定秘密保護法に限らず市民社会スペースが狭められる恐れのある動きに対してのみんなの声を表明していく形で、この新たな NANCiS という NGO アクションネットワーク、そういった NGO の政策環境を十分確保しながら、市民社会スペースを確保しながら、より良い活動ができるようにとすることで、この NANCiS が活動を進めています。

アクションネットワークの仮の連絡先が名古屋 NGO センターとなっています。名古屋 NGO センターも構成団体の一つです。以上です。

先ほどのアクションプランのところ、特に取り組みたい一つのこととして、国内課題に取り組む NGO が NGO センターの加盟団体の中にもたくさんあります。例えば泉京・垂井さんは地域の課題に取り組まれているわけですが、そういった国内課題の取り組みの NPO、NGO がどのような国際協力のニーズがあるか、今行っているものがあればご紹介していただきたいです。また、将来取り組む方向がある場合は、その可能性についてお話をいただければと思っていますが、いかがでしょうか。

河合：河合です。すみません。全く準備をしていなかったもので、どこまで答えられるか分かりません。

まず、お話を聞いていて、やはり国内課題に取り組む NPO との連携が必要だと書かれてはいますが、逆に JICA や NGO の皆さんが、その国内課題に取り組む団体と連携することで、どのような効果を狙っているのかとか、そういったところのお考えがあれば聞きたいと考えていました。あまり国内課題、海外の課題と変わらないと思うので、そんなに壁もなくできるのではないかと思います。やはり地域づくりをやっている団体と話をしていると、そういった結び付きがまだまだこれから考えていけないといけないところだと実感しています。

私たちは垂井の町づくりをしている団体ですが、持続可能な社会をつくるために、一つの方法としてフェアトレードを地域の中でいろいろな物が循環するような地産地消や、流域で考えていこうといった、流域の中で循環型社会をつくろうといったような取り組みをしています。これは日本国内、国外関係なく持続可能な地域づくりといったことでは、いろいろなところで取り組めるのではないかと考えています。

あとは、いろいろな視察受け入れや、地域づくりのところに来てもらうときに、何年か前は JICA の研修生を何人か受け入れて、水の管理の仕方や、そういった地域のコミュニティーのことなどを見てもらうことも行いました。今は、そういったところか

と思っています。

これは少し不正確で申し訳ありませんが、地域にある養蜂場が JICA の下で、地域のいろいろな技術があると思いますが、そういったところとのつながりを生かしながら、また海外の支援などもできるのではないのでしょうか。養蜂場が途上国に行って技術支援をしたといった話を聞いていますので、そういったこともできるのではないかと考えています。

中島：垂井でフェアトレードタウンを進められたんですね。

河合：はい。フェアトレードタウンを進めています。2 番目になるのではないかとわれつつ、もう 3 カ所ぐらいに抜かされていますが。まずは町レベルで初めてのフェアトレードタウンになろうと、今は頑張っています。

小川：ありがとうございました。今、河合さんより、JICA としてどのようなメリットがあるのかといったお話がありましたが、JICA からその辺りで意見はありますか。

例えば、随分前からになりますが、JICA は途上国で一村一品運動をかなり進めています。そのときに、大分県の一村一品は非常に熱心に行われていたので、その辺りのノウハウをアフリカにご指導をいただきました。

例えばタイでは今、高齢化が非常に進んでおり、日本はまさに高齢化という意味では非常に進んだいろいろなノウハウがありますので、そういったところが今、新たな途上国の課題に対して地域が持っているところでの対応ができるのではないのでしょうか。それは高齢者だけではなくて、障害者支援においても言えると思います。

そういったいろいろな、やはり国内、日本での先進事例や、工夫によって解決した問題が、かなりの部分で、今、途上国が抱えている課題にも応用、適用できるのではないかと印象を持っています。その辺りで連携をより深められたらいいのではないかと考えています。

何か補足はありますか。よろしいですか。他に、皆さまからコメントや質問はありますか。

本部で行いました NGO との定期協議会の議事録は、多分今月末ぐらいに公開されると思いますので、もしご関心があればそちらもご覧ください。

続いて、最後の報告事項です。2017 年度に実施しました国際協力カレッジの報告を名古屋 NGO センターの坂井様から、よろしくお願ひします。資料は 3 番です。それから、こちらのパワーポイントのスライドでも映写します。よろしくお願ひします。

坂井：名古屋 NGO センターの坂井です。よろしくお願ひします。

国際協力カレッジの 2017 年度の実施報告でしたが、資料が大量になってしまい環境破壊を引き起こしてしまっただけで申し訳ありません。これだけの資料を 10 分で説明するのは時間が足りないと思い、パワーポイントのスライドを急ぎょ作ってきました。もし見られなかったときのためにと思って、またさらに環境破壊でプリントアウトをしてきてしまいました。追加でこのパンフレットに挟み込んでいる資料がありま

すが、パワーポイントで映されているデータと同様のものなので、主にパワーポイントのスライドを中心に説明します。補足資料として印刷された報告書をご覧ください。

国際協力カレッジの昨年度の報告です。そもそも 2018 年度国際協力カレッジの実施が危ういといった情報を聞いて、JICA と長年一緒に行っていたこの事業のことを、もう少ししっかり説明をして共有しなければいけないのではないかとこのことで、お時間を頂戴しました。

国際協力カレッジを 3 点ほどに絞って説明します。国際協力カレッジの成り立ちと協働の歴史です。2 つ目にカレッジ 2017 年の概要、続けて国際協力カレッジの成果を報告します。

まず、国際協力カレッジの成り立ちがどのようなものか資料をいろいろと掘り出してきて、21 年前のパンフレットを載せています。JICA 中部が国際協力事業団東海支部だった頃に、実は 1997 年に国際協力の入門編の講座を一緒にやろうといったことで、国際協力カレッジの前身となる、国際協力市民講座を共催しました。これが最初に JICA 中部と一緒に市民参加の入り口の事業として共催したものです。

全国の動きとしては、1998 年に NGO-JICA 定期協議会がスタートしました。このときのメンバーは、今も変わらずですが、東京の JANIC と関西 NGO 協議会と、名古屋 NGO センターの 3 つのネットワークで、以降 20 年間継続しています。外務省定期協議会は 1997 年に全国の定期協議会がスタートしました。

ですから、JICA 中部との協働は、もう定期協議会よりも前から進んでいました。この頃、小宮さんという非常にいい所長さんで、いろいろとアドバイスをくださったりしていました。

以降、2006 年度に国際協力カレッジと名称を変更して、新たな協働事業として再スタートしました。また、2009 年の、なごや地球ひろば、こちらは名東区に JICA 中部がありましたが、こちらのオープンに合わせて、話し合いをして現在のスタイルに変更をしました。

2012 年から随意契約からプロポーザル形式に変更したので、協働の形ではなく、公募に対して応募をするスタイルに変更しましたが、一事業というよりは、もともとは協働事業であって、形上、プロポーザル形式になったといった歴史をたどってきました。

(パワーポイントの図について) 分かりづらい図ですが、当時、JICA 中部で担当をされていた今井さんと一緒にいろいろと話をしていた、この地域の NGO や国際協力分野の人材育成の中で、どのようなリソースがあって、何が足りないかを洗い出し、さらにどういったリソースがあればこの地域で国際協力の底上げになるか、NGO の底上げになるかということをお話ししました。そして、こういったものを行ったほうがいいのかと双方でアイデアを出し合い、立ち上がったのが、このイベント

になります。

これは非常に即効性のある希少なイベントであり、新聞や各メディアにも取り上げられました。また、全国の JICA の所長会議でも JICA 中部と名古屋 NGO センターの協働の好事例として共有され、全国各地の JICA から、横浜や広島のパネルの推進員の見学が相次ぎ、どのようにして実施しているかについても聞き取りをされました。

続いて、国際協力カレッジ 2017 の概要です。お手元に置かせてもらっているパンフレットがどのような構成になっているか、ざっと説明します。初めに JICA 中部、JICA の紹介で、去年は駒崎さんがあいさつをされました。中学生、高校生、大学生から社会人、退職者まで定員を超える 80 名ほどの市民が参加されました。セミナーの A の部屋が満員になっていました。愛知県を中心に、岐阜県や三重県や静岡県からも、新幹線に乗ってやってこられた参加者もいました。非常に多くの方が毎年来てくれています。

1 時間目のシンポジウムに、いろいろな国際協力の関わり方があるということで、NGO 側からも JICA 側からも協力隊を出していただいている、これで JICA もかなりの広報につながっているのではないかと思います。

今いらっしゃる泉京・垂井の河合さんも、去年は講師として出演していただきました。あとは、その講師の話をさらに深める時間帯を設けています。

(パワーポイントの写真の) 右が JICA 中部の鈴木さんです。左が青年海外協力隊を経て、シアバターのフェアトレードの会社を立ち上げた前田さんです。

次に、アピールタイムがあり、2 分間、それぞれのブースでアピールをされますが、JICA も協力隊のブースを設けていて、(写真の) 右のほうに写っています。いろいろな団体がアピールされますが、毎年他の団体が非常に上手なプレゼンをされていると、では、私たちも次はこのようにしようと工夫して、出展団体にとってもプレゼンや広報力のスキルアップの場になっています。

これがメインになります「国際協力ボランティア・インターンマッチング展」で、マッチングの機会を設けています。これは中部地域最大で唯一の場になっています。

去年は、ひろばの「SDGs の体験ゾーン」をぜひ見ていただきたかったため、その合間に体験ゾーンのツアーを組みました。こちらもとても好評で、また日をあらためてこのコーナーを見たいといった参加者もいました。

全体会の振り返りで、出展団体、参加者を含めて全体で共有する場を設けています。2017 年の参加者によるアンケートでは、とても良かった、良かったが 100%、テーマ別講座が 94% の満足度、ボランティア・インターンマッチングでも 88% でした。出展団体からのアンケートではボランティア、インターンを希望する人が行った団体は 83% で、かなり毎年安定的に高い評価をいただいています。詳しくは報告書にも記載していますので、そちらをご覧ください。

参加者の声をいろいろとここ(配布資料)にも集めています。時間があまりないの

で割愛します。こちらは出展団体の声です。「このイベントがなければあまり人が集まらないので、絶対に毎年続けてくれ」といった声も聞いています。

実際にどのような人が成果として活躍しているかについて、毎年パンフレットに過去の参加者のうち、その後、協力隊に行っていたり、国際協力カレッジの出展団体で活動している元参加者の声を載せています。例えば、(パンフレットの写真中の)この元参加者の方は出展団体を通じて、イベント後、ニカラグアに行かれました。また、(パンフレットの写真中の)この方は国際協力カレッジに参加して、イカオ・アコさんと出会われ、今はなんとイカオ・アコさんの理事をされています。国際協力カレッジを通じて、そういった人材発掘にもつながっています。そして、(パンフレットの写真中の)この方は国際協力カレッジを通じて、青年海外協力隊でベナンに行っていました。

こういった1日のイベントではありますが、より成果を出すため、質を高めるために、名古屋NGOセンターとしては全職員、担当理事やインターン・ボランティアで15名ほどが全員で団体を挙げて取り掛かっている事業になっています。1日のイベントであっても、6カ月ほどの期間をかけ、準備をしたり、広報をしたり、団体との調整を行ったり、報告まで、大体半年ほどの時間がかかります。

いろいろと資料を端折ってしまいました。名古屋NGOセンターとJICA中部担当の協働事業ではありましたが、続けているうちに、毎年認知度が高まってきました。一般の方から、今年はいつありますかとか、出展団体の方からも、12月の何日ですかといった問い合わせをもらっています。

ただ、公示が出て私たちも応募をする形を取っているのですが、私たちが運営すると決まっているわけではありません。たとえ名古屋NGOセンターがこれを担うことができなくなったとしても、存在してほしいと思う地域の財産の一つになっていると思いますので、地域のNGOのためにも、国際協力の底上げのためにも、ぜひ続けていきたいと思っています。少し長くなりましたが、以上で報告を終わります。

小川：どうもありがとうございました。昨年度の実績とともに、成り立ちと協働の歴史もプレゼンしていただきました。私も初めて知りました。ありがとうございます。

今のご報告に対して、何かご質問やコメントがありましたら、よろしくお願いします。

後藤：それでは、イカオ・アコからよろしいですか。

小川：お願いします。

後藤：ここ数年ブースを設けさせてもらっています。その中でNGO側が参加者にインパクトを与えることもありますが、逆に参加者も非常に元気な方たちばかりで、NGO側も、このような若い人がたくさんいるのであれば、NGOも頑張らないといけないなといった、もう1回原点に戻るようなこともありました。

先ほどパンフレットの中で紹介してもらいましたように、有能な方との出会いもあって、インターンに採用したり、ボランティアで来てもらったりしていますので、

これはこれでぜひとも残してほしい企画だと思っています。私だけがこう思っているのではなくて、関係の出展された団体の方はみんなそう思っていると思います。以上です。

小川：ありがとうございます。河合さん、どうぞ。

河合：私は去年お話ししました。NGO、NPO 側から見て、普段アプローチできない人たちにアプローチができる場で、関わりたいとって実際に私たちのフィールドに来ていただいた方もいます。少しずつですがボランティアをやっていただいている方もいるので、マッチングをしていただけて、とてもありがたいと思います。

また、国際協力との名でみんなは来ますが、私たちのような地域と世界と一緒に同じ課題だとやっているようなところや、国際協力といった言葉も、参加者にとってまた違うイメージになります。

例えば去年は会計やバックオフィスのことで関わっている人に登壇していただいて、現地に行って何かをするだけではなく、いろいろな関わり方があるといった仕組みがこの国際協力カレッジにはあります。先ほどから国内団体との連携が大切だと言っている中で、参加者の皆さんにも、そういったところでもアピールできるような仕組みになっているのではないかと思います。ぜひそういった形で続けていただきたいと思います。

小川：ありがとうございます。他にはよろしいですか。

それでは次第に沿って報告事項 4 点が現時点で終わりました。ただ今から 5 分間の休憩を取り、その後、協議事項に移ります。今は 41 分ですので、46 分まで休憩します。ありがとうございます。

中島：協議事項で「草の根技術協力事業の向上、裾野拡大に向けて」、「NGO の人材の能力向上」と、2 つの好事例の紹介を、それぞれ大体 10 分ずつ発表していただき、その後、最後にまとめて質疑をしたいと思います。

では、最初に DIFAR の瀧本さんからお願いします。

瀧本：よろしく申し上げます。

当会がイカオ・アコさんとは全く違うのは、当会の現地の代表者が私の娘で、特に国際協力などを勉強したわけでもなく、野菜栽培隊員として行き、その後に課題を見つけ、現地の人が必要としていることを一緒にやっていきたいと思い、その後協力隊の任地で今の活動を始めました。それを聞いた母親である私が、面白そうだから一緒にやろうと 2 人で始め、その後に友達に声を掛けて始めた本当に素人の団体です。

活動をしていくうちに、徐々にやっていきたいことが大きくなり、それに対してお金も必要になったので、資金を提供してくれるところを探しました。JICA は自分が協力隊でお世話になったこともあったので、この JICA 中部に相談に行きました。そのときの担当の方が非常に親切な方で、ここにも書いていますが、手取り足取り教え

てくださり、草の根技術協力事業の案件の採択を受けました。今、振り返って思えば、本当に自分たちは怖いもの知らずであったと思います。全く何も知らなかったです。実際にその案件が採択されるまでは任意団体でしたが、草の根技術協力事業の案件を採択される条件の一つに NPO でないといけなかったため、NPO の取得を始めました。

それから、先ほどもお話ししましたが、採択されてから 1 年以内に事業を開始するのが、そのときのルールでした。実際に始まったのが 2013 年 6 月ですが、6 月のこの時期に条件が整わなかったらなくなってしまう、最後のぎりぎりの時期の本当にあと何日というときに協力基本協定文書、AMCB がボリビアで出来上がり、それで初めて事業が始まりました。

始まった後も、私たちの事業の最初の 1 年間は、確か 2,800 万円だったと思いますが、そのほとんどが堆肥場を建てるために使う予算でした。当時は JICA の事業をする前に国際ボランティア貯金寄付分配事業から 3 年（合計 4 回）ほど助成金をいただいて堆肥場を建てました。それで、その堆肥場を建てたときのやり方で行けると思っていたら、JICA の求める手続きの方法に、私たちの知らない言葉があまりにもたくさんありました。例えば一般競争入札や、それから建設に必要な検査項目の中の何だったか忘れましたが、何をどうしていいのかわからないような言葉がたくさん出てきて、本当に大変でした。本日これを発表してくださいと言われて、5 年間の今までのいろいろなものを読んでいると、最初の 1 年間は本当に大変で、一体どうなるのだろうと暗中模索の 1 年でした。

ただ、今は 5 年が終わり、振り返って考えて、本当に良かったと思うのは、何も知らない素人集団の私たちでしたが、JICA の職員の方に手取り足取り教えていただいて、担当者はとても大変だったのではないかと思います。担当者も大体 1 年ごとに代わりますが、その担当者が代わって、またその人が 1 からいろいろなことをやってくれますが、その人たちに手を引っ張られて 5 年間やってきました。

当会の会計の担当者は元大学職員で、事務手続きやいろいろな JICA 的な仕事をしてきた人なので、また、現地で仕事をしている現地代表の瀧本里子は若いときに協力隊で行き、それで、その現地の人たちにいろいろとお世話になり、少しでも恩返しをしたいと思い、今の活動を始めているきっかけがあったもので、何もかもが現地寄りの考え方で、現地の人にとってどうかといったところで考えていくスタンスです。

会計担当者は、どちらかというと JICA 的な考え方をする人なので、いつも JICA にいろいろと提案をするときや会計のことも含めて、まず、いつもそこでチェックを受けます。それがとても良かったと今になって思います。私もそうですが、どうしても自分のやりたいという気持ちで活動している人は、お金のことがとても苦手だと誰かが言っていましたが、本当にそのとおりです。事務的なことや、絶対に欠けてはならないことが難しいですが、そういったことをチェックする人が会の中に 1 人い

てくれたのは、とてもありがたかったです。それで団体内で調整がだいぶできて、少しは JICA に対しても良かったのではないかと思います。

協力隊との連携で、幾つかの今まで行ってきたことをここに書きました。例えば 2015 年 9 月にボリビアのサンタ・クルスに領事館があり、その日本領事館が主催するバジェグランデ日本祭りと運動会をやることになり、DIFAR も一緒にやりましょうと誘われて準備をしました。現地ではたくさんの協力隊が派遣されていて、その人たちに一緒にやりませんかと声を掛けました。そして、現地の領事館の方からボリビア JICA 事務所に協力隊と一緒にやりたいので、ぜひ派遣してくださいといった提案がありました。

そのときの JICA の答えが「すみ分けを行ってください」とか、「隊員は隊員の活動を優先してください」とか、「かかる経費は出せません」といった否定的な回答が非常に多くありました。日本のことを一緒に行きたいという協力隊員がいるのに、どうして JICA の事務所の人はこんなに冷たいのだと憤慨し、対応にだいぶ苦慮していました。

5 年たって、今この文書を読んだときに、実際のことは私たちにもよく分かりませんが、JICA の回答は常識的な内容で、特に変なことは言っていなかったと思いました。私たちの進めていく順序が間違っていたのかなと思います。やはり JICA から派遣されている JICA の協力隊員のことに関しては直接協力隊に内々で話をするならともかく、進め方としたら、やはり JICA 事務所を通して、そちらから協力隊員に言ってもらおうという進め方ができなかったからかなと思います。

細かいことはよく分かりませんが、この頃は、非常に正直な話、JICA ボリビア事務所と DIFAR の間は険悪なムードでした。なぜだろうと言いながら、しかし、年月が過ぎると、なんとなく雰囲気が変わってきて、今は全くそういったことはありません。いろいろな条件はあると思いますが、そのときはそのような状態でした。

現地の他の県に派遣されているシニアボランティアの汚水処理の専門家に、堆肥場の汚水の臭いなどの問題もあったので、ぜひ来ていただきたいと事務所に要請して、それでリサイクルセンターの汚水処理の指導をしていただいたこともありました。

私たちはバジェグランデというところで活動をしていましたが、その隣にパンパグランデという村があって、そこからバジェグランデのリサイクル事業を見学に来られましたが、その派遣されている中に協力隊員がいました。その方はパンパグランデのごみについて、このようにしたいといった思いがありました。特に農薬の容器をそのまま放置していることが非常に危険で、何とかしたいのですが、パンパグランデはお金がないためその事業ができませんでした。DIFAR で、それを地球環境基金に申請をして、採択をされたら協力隊員がそのプロジェクトマネジャーとなる形で実際に進めてもらうことがすんなりと受け入れられました。そして、この隊員は 1 年

ほど、協力隊員でありながら DIFAR の地球環境基金のプロジェクトマネジャーとして中心となって活動をしてくださいました。

この方は現職で市役所から派遣されていましたが、1年間延長されましたが、その後はまだ現職なので元の職場に帰られました。このプロジェクトが3年のプロジェクトです。日本でずっと仕事をしていましたが、自分は協力隊員でもないし、日本に住んでいるけれども、いろいろなことをずっと一緒に相談をしながらやってきました。最終的にこの方は今年の9月に職場を辞めて、このプロジェクトのマネジャーとして最後の年を一緒にやっていきたいとのことでボリビアに行かれることになりました。そうなるには、家に帰ってから、お父さんやお母さんと何十回も話し合いをされたらしいですが、本人の強い希望でそうなったそうです。

そういったことで、協力隊の方やシニアの方たちのお世話になり、この6月で事業が終わりましたが、最初から最後まで、いつもどうしたらいいのか分からない状態でした。しかし、そこでツーストライク、スリーボールと、最後にサヨナラホームランのようなものが出ます。それは自分たちではなくて、誰かがどこかから白馬の王子のように出てきてアドバイスをくださったり、実際に助けてもらったりしました。それはいろいろな人だったと思いますが、そのおかげで何とか無事に到着しました。私の実感がそのような形です。

JICA の事業はこんなに大変なことだと思わず進めてしまった自分たちでしたが、やってみると前に進むしかありませんし、そこには助けてくれる人も周りにたくさんいてくださり、結果として、とても良い経験をさせてもらった感謝の思いでいっぱいです。ですから、このことで私自身も他の人も、いろいろな勉強をすることができましたし、名古屋 NGO センターのお世話にもなりましたし、これからどうしていくかもあらためて考えることもできました。

先ほどもハードルが高いといった話がありましたが、ハードルは高いことも考えずにやってしまったことが良かったのか悪かったのか分かりませんが、生きていく上でやりたいことがあったら進んでいったら必ずドアは開かれるのは本当だと思うので、そう思う人はどんどん挑戦されたらいいのではないかと思います。ありがとうございました。

中島：ありがとうございました。名古屋 NGO センターが管轄の所属の NGO は、中小の NGO が多く、東京の JANIC の加盟団体と比べると、あちらは大型の NGO で、パートナーシップ型の草の根技術協力事業を行っています。そういった東京では聞けないお話を、ここで聞いたような気がします。また、全国にもこういった事例があると、ぜひ共有したいと思いました。

瀧本：11月に現地の代表が帰ってくるので、ぜひ報告会をさせていただければと思っていますので、よろしくお願いします。

中島：そうですか。ありがとうございます。

では、質問もあると思いますが、時間の関係もありますので、質問は後でまとめて受け付けます。それでは、イカオ・アコの後藤さん、お願いします。

後藤：お手元に資料がありますが、同じものがスライドにもなっています。スライドは実質3枚だけなので、スライドはなくてもいいと思います。

私は草の根技術協力事業は非常にお得であるといった話をしようと思います。草の根技術協力事業によって、イカオ・アコはNGO人材の能力が上がったかと言われると、自覚はあまりできません。これは自分のNGOなのでその辺の認識は難しいです。それでもどのように能力が向上できるのか、どのような可能性があるのかといった話をします。

イカオ・アコは環境NGOですので、テーマも皆さんと違いますし、それからNGOの形態も、もしかすると皆さんと異なるかもしれません。そういった意味では非常に偏った話になるかもしれません。

スライドを1枚進めます。イカオ・アコは草の根技術協力事業を3つ実施してきました。実施している現在進行形のものも1つあります。それから、関連でJICA基金も1つ実施しました。もともとはマングローブの再生をすることからNGO活動を始めました。2007年からマングローブの再生に関わるような支援型の受託を行いました。

このJICAの草の根技術協力事業を行っていて思ったのは、これは法人化しておかないと恥ずかしいといったことが分かりました。そういったこともJICAをやっていなかったら分かりませんでした。そのような意味ではNGOの基盤整備が徐々に進んでいったような気がします。

備考に書いていますが、プロジェクトマネジャーは20代、30代の若手です。これがまたJICAといろいろとやり合うことになりました。JICAにすると安全側で50代などのおじさんなどがいいかもしれませんが、私のNGOとしては、スタンス的に若い人を育てることが非常に大事だと思います。将来の日本を支える有能な若手がたくさん出てきてほしいと思いますので、あえて若い人をプロジェクトマネジャーにしてきました。このスタンスはずっと変わりません。

次に、パートナー型に挑戦しようということになりました。これは、プロジェクトマネジャーは若手の方が頑張ってくれて、自分の専門を生かして、流域の視点を加えて、臨海部のマングローブだけではなくて、山間部の植林もしよう。環境教育がベースになるでしょうし、単に植林をするだけではなくて、産業としてエコツーリズムのようなものも考えていこうということです。これが結構面白くて、事業が終わってからも小さな助成金を積み重ねてここまで来ました。3年ほど前にフィリピンの観光省から、コミュニティーベースとツーリズムの部分のグランプリをもらうことになりました。このJICAのプロジェクトがベースになったということです。エコツーリズムで顕彰されました。

そして、上流部では去年、日本水大賞をもらいました。これは違法伐採を行っているところをいかに有機農業に転換させていくかといったことで、そのためにかんがいも造らなければいけないため、小さなプロジェクトを起こしました。それが成果となって、秋篠宮さまがご列席の下で顕彰されました。これは非常に名誉でした。これは JICA の草の根パートナー型がなければ成し遂げられなかったという意味では、非常にわれわれにとってみると、いい経験をさせてもらいました。

そして、順番はおかしいと思いますが、ここで JICA 基金を挟みます。通常は JICA 基金支援型、パートナー型といった順番だと思いますが、ここで JICA 基金を挟んで、パートナー型のフォローアップを行いました。正直、上流部のプロジェクトがうまくいっていなかったもので、食品加工のようなことで貧困山村の生計向上を図れないかといったようなことです。

それから、現在進行中のものですが、話のがらりと変わり、植林ではなくてごみの減量化に取り組んでいます。これがボホール島で行っているプロジェクトです。

1枚めくってください。それでは、NGO の人材の能力を向上させるための、JICA が主催する研修や勉強会にどのようなものがあるでしょうか。これを調べてみると非常に多様なものがあり、分野別、国別のものがあります。非常に充実しているなど、あらためて驚きました。当然国際協力の現場で必要となる、いろいろな知識やスキル、そういったものを得ることができます。

これは、草の根技術協力事業を行ってなくても一般の NGO も参加することができます。しかし、草の根技術協力事業を行うことによって、担当者からこのようなことがありますよ、このような研修会がありますよといったことを教えてもらえます。こういったものを受けておくといいですよということも推薦してもらえますので、草の根技術協力事業を受けるという意味では意義があったと思います。

イカオ・アコが最近受講した研修は、これは私が受けたものではありませんが、スタッフやインターン数名が受講しています、PCM 研修です。これはプロジェクトを形成するとか、あるいは最後にプロジェクトを評価するときに非常に有効な手法だと思います。それから、フィリピンで活動をしていますので、法制度をしっかり勉強したいため、この研修にも参加しました。

それから、マングローブの植林はフィリピンではなくてベトナムにも広げられないかと悪くみをして、そういった勉強会にも参加しました。結局このベトナムの法制度の勉強会に参加して、これは無理だなと思いました。残念です。

最近担当者の推薦を受けて、自治体・JICA 連携による国際協力推進勉強会、JICA の草の根技術協力事業で推進している廃棄物関連の事業、どのように全国でされているのかといった勉強会でした。いい情報を得ることができました。

1枚めくってください。草の根技術協力事業でイカオ・アコがどのような能力を獲得したのかです。網羅的に1番から9番まで書きました。本来ならここに○、△、×

が入って、どの能力が身に付いたと言えることができればいいですが、頭の中には多分こうだろうなとは思っています。

プロポーザルを書くことが草の根技術協力事業は非常に大変です。私は大体 1 カ月かけています。当然たくさんの本を読んだり、ネットで調べたりして、そういった意味では 1 番、2 番の企画提案力や、課題に関わる専門能力が身に付くと思います。先ほどごみの減量化の話をしました。私はごみ問題の専門ではありませんが、本を何冊か読んだら専門家になったような気がしました。

それから、四半期ごとに報告書を提出します。これも非常にタフな仕事です。見方を変えれば資金管理がうまくいくことです。それまでどうしていたかという、1 年たたないと資金がどうなっているか分からないといった極端なことでした。そういった意味ではいい手法を教えてもらったと思います。

私は○を付けたのは 5 番目のプロジェクトマネジメントの能力です。今は半期ごとに進捗(しんちょく)の報告を JICA にしますが、報告しなくてはいけないため、それが頭の片隅にあるので、プロジェクトがきっちり進んでいきます。

△としては、6 番目の成果が出るパートナーシップ形成能力です。いろいろな利害関係者と調整をしていないといけませんので、パートナーシップを形成するとか、あるいは最後の 9 番の対人関係力やコミュニケーション能力も必要で、伸ばしてもらったと思います。特に JICA とやり合う場面も何回かありますから、そういった中でコミュニケーションの能力も当然高まっていくと思いました。

こういったまとめ方になりましたけれども、以上で私の発表を終わります。

中島：ありがとうございました。名古屋らしい 2 つの中小の NGO が草の根技術協力事業に取り組んだ事例の発表でした。最初は NGO 側で質問や感想がありましたらお願いします。後で、ぜひ JICA 側の方からもコメントなどをいただければと思います。

では、NGO 側の方はいかがでしょうか。質問や感想でも結構です。

横山：ありがとうございました。初めに JICA から NGO のニーズを把握するためにアンケートを取るといった話がありましたね。まさに NGO に寄り添った姿勢ではないかと私は受け止めました。

その背景の下で瀧本さんがお話しされた中で、手法、方式において本当に難しかったと終始言葉が出ていました。それならば、あえてどうして難しく成り立っているのでしょうか。もっと簡単にできるのではないのでしょうか。それが私の素朴な気持ちでした。以上です。

中島：それは JICA への質問ですか。

横山：そうです。

中島：では、JICA 側の時間のときに併せて答えていただきます。

横山：はい。

中島：NGO 側では、他にいかがですか。意見や質問はありますか。

石本：はい。

中島：石本さん。

石本：後藤さんに質問です。2枚目のスライドの、この事業の取り組みのところで、あえて若手のプロジェクトマネジャーを採用したとお伺いしました。確か草の根技術協力事業の案件を出すときに、プロジェクトマネジャーの経験や技術も採択の基準に勘案されると読んだ記憶があります。後藤さんはその辺りをどのようにクリアされたのでしょうか。

後藤：履歴書を出すのが最低条件になっています。やはり履歴書をうまく盛らないといけません。うそを書けというわけではありません。きれいに、それなりに書くということだと思います。何もうそをついているわけではありません。書き方は、就職試験のときもありますし。

石本：では、若いけれども経験をしっかり積んでいるのだと思わせるような書き方ということですか。

後藤：そうです。

石本：ありがとうございます。

中島：他の方はどうですか。感想でも結構です。委員の方、ぜひどうぞ。事例を聞いて、うちの団体も取り組みたいと思われた方はいらっしゃいますか。よろしいですか。

私から質問します。1つは、先ほど瀧本さんが言われていた、方向が分からなくなったことがありました。それまで任意団体として活動していたときには、会員と向き合っただけで一緒に進んでいる感じでしたが、委託事業を受けることによって事務作業が増え、心の向く方向が変わってきたとあります。これについて、私たちは誰に対してアカウンタビリティを持っているかということで、それまでは会員に対してのアカウンタビリティが、JICAに対するアカウンタビリティのバランスがぐっと増えて、こちらがおろそかになってしまっているといったことでしょうか。そうだとすると、それはある意味でクリティカルな問題ではないかと思ったものですから。

瀧本：そういったことだったと思います。今までは心の半分ぐらいと一緒に活動を行っている会員や支援者の方々に向いていましたが、割合がだんだんと少なくなって、JICAに出す書類や、JICAにこうだから、あだからと説明をすることなどが頭をたくさん占めるようになると、会員の方たちに対する気持ちが徐々に薄くなるというか、思うことが少なくなって、私は一体何を考えているのかなと思ったことがありました。そこにも書きましたが、では、どうしてJICAの草の根技術協力事業に応募したのかということ、やはり自分たちがこういったことをしたいといったことに対して、それだけ必要性があったから応募をしましたし、それをやりたいことは会員の方々もそう思ってくれていたことがだんだん分かってきました。

ですから、確かにそのことで離れた人もいましたが、徐々に現地の人たちに対して活動をしていくことが大きくなり、成果が出て、とてもうれしいと言ってくれる方

も確かにいるので、100%どちらがいい悪いではなく、自分たちはそう思って行動したと思います。それで一緒に活動をしてくれた方はそれで一緒に活動をしてっていると、今は思っています。難しいですね。

中島：後藤さんの団体では、そういったジレンマのようなものはありませんか。私たちは会員と JICA とどちらを向いて仕事をしているのかといったところです。

後藤：会員というよりも、やはり現地の住民の方々ではないかと思えます。やはり一番住民に近い立場で活動しているのはわれわれですので、やはり、われわれが間違っただけで行っているわけではありませんので、一応は主張させてもらいます。会員との乖離（かいり）といったことは特になかったと思えます。

中島：ありがとうございます。私たちは、現地の人たちに対するアカウンタビリティも持っていることをお聞きしました。

それでは JICA 側から質問や感想などを、ざっくばらんにお願いします。いかがですか。

内島：先ほど問い掛けをいただきましたので、そのことに関してのお話と、その前に私の個人的な感想を述べさせていただいて、問い掛けに対する答えとしたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。今の 2 つのお話と、休憩の前のカレッジの話もそうですが、私は草の根技術協力事業の現場からの報告や具体的なお話、活動成果報告などを聞く機会はこれまでも何度もありました。あるいは向こうのカウンターパートの方々から評価や印象を聞く機会はこれまでもありました。

しかし、マネジメントの部分というか、運営のことで全体を総合的に取りまとめて、このような形でのお話を聞かせていただくことはあまり経験がありませんでしたので大変参考になりましたし、カレッジのことも含めて興味深く聞いていました。

先ほど少し褒めていただいた、裾野を広げようとしていることはいいことだといったことに関連してです。別の説明をすると、裾野を広げようとしていることは、きっと裾野のもう少し広い、遠いというか、団体の方々でもきっと参加していただけるのではないかと思っているからこそです。裾野を広げて逆に困ってしまうというか、できないことをできない団体に押し付けるようなことの可能性をもし思っているのであれば、裾野を広げようなんて思いません。裾野を広げると同時にそういった新しい方々にもこういった活動を行っていただけるに違いないし、行っていただきたいと思っています。ですから、それを褒めていただいて少しうれしかったです。

難しいといった部分に関しては、確かに何とかならないだろうかといった気持ちはあります。ハードルはより低いほうがいいとは思いますが、ただ、お金のことに関しては、どうしてもそうはいきません。

先ほど、瀧本さんが分かりにくかったと言われた中で 2 つ挙げると、一般競争入札で、それは金額の決め方だと思います。そして、協力隊とのコラボレーションというか、協力をどのような順番で進めればいいのか難しかったといったことでした。一般

競争入札はお金のことなので、そう簡単に単純化できないと思う一方で、協力隊との連携は、お金はもちろん関係はしていますが、もっと別の部分での協調、連携だと思います。ですので、それはもう少し簡単に分かりやすくする方法は、きっと探せばあるだろうと思いつつ伺っていました。

その意味で、任意団体から始まり、きちんといろいろなことを学びつつできましたといったご報告をいただくと、ますます裾野を広げていく必要性和や価値があると思われましたので、本日のご報告は非常にありがたかったです。難しい部分についても、どうしても難しいまませざるを得ないところと、きつともっと簡単に分かりやすくご説明できるに違いないため、これはまた対話の中でうまく見つけて、仕分けていかないといけないなと思われました。

以上で、少しの感想と答えのつもりで手を挙げさせてもらいました。ありがとうございます。

中島：他に質問や感想はありますか。

木下：すみません。

中島：お願いします。

木下：後藤さんにお聞きします。NGO 人材に望まれる能力とその獲得と、1 番から 9 番まで、こういった能力が携わるような育成をされてきたと。意識的に若い方をプロジェクトマネジャーで提案しているといったお話でした。そういった方が育って、このような能力が携わってくると、辞めてしまうことはありませんか。他の NGO に行ってしまうとか、NGO の世界でより給料のいいところ、あるいは国連の機関など、そういったキャリア形成はあるような気がします。育つと出てしまうのは、どこの世界でも同じかもしれませんが、そういった悩みはありませんか。

後藤：4 名のプロジェクトマネジャー経験者がいますが、残っているのは 2 名です。そういった意味では歩留まりはいいと思います。この世界は人の流動が激しいので、何年かたつと辞めていくのは覚悟しています。

NGO は機会を与える場だと思えば、私もショックは全くありませんし、また逆によそから来てもらえるチャンスもありますので。実際にそういった方もいました。そういった意味では五分五分で、同じ土俵で戦い切磋琢磨（せつさたくま）をする、協働できる場だと思います。

木下：ありがとうございました。

小川：質問ではありませんが、横山さんから簡単にできないのでしょうかといったお話がありました。私も簡単にできたらしたいとは思っています。

そして、中島さんが質問をされていたアカウンタビリティーが、会員から JICA に向けているのかといった話がありました。非常に似たような共通している部分があると思います。というのは、アカウンタビリティー、JICA にとっているのは、つまり私どもの事業は税金で行っている事業なので、JICA であって、実は JICA では

なくて、その後ろに税金を払っていただいている国民の皆さんがいらっしゃいます。ですから、われわれはきちんと国民の皆さんに対して説明責任を負っています。そういった中で、例えば非常に煩雑で難しい経理で、何かをするときにも見積もりを取り、競争をすることもあります。やはり国の会計規程に準じて私どもは行わなければいけないといった縛りがあります。補助金などでできればいいでしょうが、委託事業の性格の中では、それは非常に難しいです。DIFAR さんから、堆肥場を建設するのが非常に大変だったといった話がありましたが、やはり私どもの事業の関連で造ったものが何かの理由ですぐに壊れてしまい、事故が起きて誰かを傷つけてしまうと、それは非常に問題ですから、やはりそういったものに対する安全管理という責任も負っています。

それから、私ども JICA は ODA を実施している機関ですので、それぞれがやはり国の開発課題に対して、いかにその開発課題を解決するためにやっていくか。やる以上はある程度の成果も出さなければいけません。そういったところも全部見ていき、それを日本の国民に対しても、それから途上国の支援をされる側の方々にとっても、事業を実施している団体さんにとっても、皆さんが理解をして納得していただける形で常に対応しなければいけません。本当は簡単にできたらいいですが、どうしても難しくなっているのが現状です。そこはご理解いただくしかないのではないかと思います。

それから、後藤先生から JICA は研修や勉強会が非常に充実しているといった言葉をいただきました。そこで、時間がないので詳細は別途アナウンスしますが、簡単に近々にある支援事業を紹介します。

私どもには幾つか NGO 等の活動支援事業がありますが、今年度の NGO 向け事業マネジメント研修の立案編が間もなく開始されます。細かい情報は、また皆さんにメール等でお伝えします。準備講座と立案で、現場を含めて両方あります。準備講座だけの受講も可能ですが、早いものと 8 月 7 日から始まります。全国内機関にてテレビ会議で出席が可能です。出席を希望される方は、8 月 7 日が第 1 回で、10 月 3 日まで全部で 5 回に分けてあります。どれも全て同じ内容です。都合のいいものに手を挙げていただいて、実際の開催日の 5 日前までが応募の締め切りとなっていますので、関心のある方は現場の課題ニーズに基づいてどのように草の根技術協力事業を立案、提案するかといった講義になっていますので、お願いします。現地で行う立案講座の締め切りは 11 月 22 日で、まだ若干先ですので、ご覧ください。

それから、もう 1 つは、JICA はさまざまな保健医療や、環境などの課題に対応したことを行っています。そういった課題に対してどのようにわれわれが考えているのかといったセミナーを行います。これは課題の分野によって、例えば教育や福祉や農業や水といったテーマごとに日にちが違ってきます。7 月 31 日から 8 月 3 日までの間で、それぞれのテーマが組まれています。こちらについても別途ご案内しますの

で、ご関心のある課題で JICA 側がその課題解決に向けてどのようにアプローチを考えているのかといったところでご関心があれば、ぜひこれも聞いていただければいいと思います。事業の紹介を兼ねましたが、以上です。

中島：ありがとうございました。皆さまの積極的なご参加により、意義のある報告と協議ができました。

それでは今年度最初の協議会の最後にあたり、名古屋 NGO センター代表理事の八木さんより一言お願いします。

八木：感想も交えて最後の言葉にしたいと思います。

本日の全ての報告を含めて、個々の事例でいいますと、個別の団体は JICA に個別に相談をすればそれで済む話ですが、やはりこういった場で教訓化してみんなのものにしていくことは、私たち NGO 側にとっても、JICA 側にとっても、意義のあることではないかと思いました。ただ、NGO 側だけで話したほうがいいような中身もあったような気がしました。やはりこういった場所は非常に重要だと思いました。

冒頭に私は役員になってまだ浅いといった紹介をしましたが、役員になってからいろいろな NGO 団体などに顔を出す機会があり、そこでいろいろと話を聞いていくと、今は JICA と地方のネットワーク型の NGO が連携することは非常に大事だといった話をよく聞きます。その背景には地球的な規模で取り組んでいく SDGs の問題などがありますし、先ほどもお話がありましたアクションプランといった形で 3 年間を通じてこのようなことを行いましょうといったものもあります。

その中で非常に期待はされていると思いつつも、自分のところを見ていきますと、どこの団体も財政面も含めていろいろな面で非常に大変な状況に陥っています。先ほど ODA なのではないかといったことを言われていましたが、国内課題をどのようにするかといった話も出ていましたし、もう一工夫といえますか、そういった踏み出しができないかと思っています。大変な中でもありますが、やはり期待も大きいですし、活動を行っていかねばいけないと思っていますので、そういった知恵などを出し合って、もう少し先に進められたらいいなといった感想を持ちました。

本日は NGO 側の皆さんも JICA 側の皆さんもご出席いただき、どうもありがとうございました。私もコーディネーターですが、コーディネーターの方には準備の際にいろいろとお世話になりました。どうもありがとうございました。引き続き、こうした協議会が意義のあるものにしていけるように、双方が頑張って進めていきたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。

中島：それでは、終わります。ありがとうございました。

一同：ありがとうございました。